

水稲新品種「ユメコガネ」の栽培法

高橋好範・柏原一成・石山伸悦

(岩手県農業研究センター・県北農業研究所)

Cultivation Method of New Rice Variety "Yumekogane"

Yishinori TAKAHASHI, Kazunari KASHIWABARA and Shinetu ISHIYAMA

(Iwate Agricultural Research Center, Kenpoku Agricultural Institute)

1 はじめに

ユメコガネは耐冷性が極強で、品質、食味も良好であることから、岩手県において主に高標高地帯(350m以上)の準奨励品種として採用された。本品種について、安定生産することを重点に栽培法を検討した。

2 試験方法

1992年から1997年にかけて、延べ4箇所で栽培試験を実施した。施肥の処理のうち基肥は窒素量6kg/10aを標肥として3段階とし、主として幼穂形成期追肥を組み合わせ、

1996年には減数分裂期追肥の試験も組み合わせた(表1)。

3 試験結果及び考察

(1) m²当り数(以下粒数と略記)が29千粒/m²を下回ると、1.7mm篩調整精玄米収量(以下、収量と略記)が570kg/10a以下となるが多いため、目標粒数の下限値としては29千粒/m²を設定した。図1からは、36千粒/m²程度の粒数でも登熟歩合80%程度が得られているが、試験年次が登熟環境の比較的良好な年次だけであることと、粒数が33千粒/m²を越えると倒伏の危険性の高い稈長75cm(データ省略)を越える事例が見られること等から、目標粒数の

表1 試験区の構成及び施肥量

試験場所	標高	土壌タイプ	年次	本田基肥窒素量 (kg/10a)	追肥時期*	栽植密度 (本/m ²)
旧岩手農試 県北分場 (軽米町 軽米地区)	150m	灰色低地土	1992	6+2	-25	26.7
			1993	6+2, 8+2	-25	26.7
			1994	6+2, 8+2	-25	26.7
			1995	6+2, 8+2	-25	26.7
			1996	4+2, 6+2, 8+2	-15, -25	26.7
県北農業研究所 (軽米町 山内地区)	240m	多湿黒ボク土	1997	6+2, 8+2	-25	22.2
沢内村 高下地区	320m	褐色低地土	1993	6+2	-25	22.2
			1994	6+2	-25	19.5
			1995	6	-25	22.2
			1996	6+1	-25	22.2
一戸町 奥中山地区	430m	褐色低地土	1993	6	-25	19.4
			1994	6+2, 8+2	-25	19.5
			1995	6+2	-25	18.9
			1996	4+2, 6+2, 7+0, 8+2	-25	20.3~21.2
			1997	4+2, 6+2, 8+2	-25	18.6

注. * : -15 ; 減数分裂期追肥, -25 ; 幼穂形成期追肥

表2 ユメコガネの生育診断基準, 収量構成要素診断基準

稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	m ² 当り数 (千粒)	登熟歩合 (%)	1.7mm千粒重 (g)	1.9mm(1.7mm) 篩調整収量(kg/10a)
68~75	400~470	65~75	29~33	80%以上	22g前後	540~600(570~640)

表3 ユメコガネの栄養診断指標

項目 診断時期	乾物重 (g/m ²)	稲体窒素濃度 (%)	窒素吸収量 (g/m ²)	追肥方法
6月下旬	40~80	3.8~4.1	1.5~3.5	追肥の重点時期は幼穂形成期とする。窒素施肥分量は2kg/10a程度とする。
幼穂形成期	170~280	2.5~3.0	5.0~7.0	
穂揃い期	700~850	1.1~1.5	8.0~12.0	

上限は、33千粒/m²と判断した。この目標籾数を確保するための生育診断基準及び収量構成要素診断基準を作成した(表2)、栄養診断基準を示した(表3)。

(2) 表2及び表3に示した生育量を確保するための基肥窒素量は標肥の6kg/10a程度と判断された。追肥時期としては、籾数の安定確保のため幼穂形成期重点が望ましいと考えられ、量としては窒素成分で2kg/10a程度が適当と思われた(データ省略)。また、安定して目標籾数を確保するためには栽植株数は22株/m²程度とすることが重要と判断された(データ省略)。

(3) 登熟積算気温で900~1000℃程度が確保出来れば、整粒率は80%以上となり、刈取り適期と判断された(図2)。

(4) ユメコガネは極早生品種であり、適応地帯が寒冷地でもあることから、他の早生から晩生品種に比較して幼穂形成期の生育量は小さめで、稲体窒素濃度はかなり高い時期での判定となる(表3、図3)。

4 ま と め

収量を確保しつつ、登熟歩合低下や倒伏の危険性の少ない生育量の目安として、29千~33千粒/m²の籾数を設定し、これを確保するためのユメコガネの栽培法や、刈取り適期の基準を示した。本品種の栄養診断基準作成により、岩手県においては極早生から晩生種までの栄養診断基準がそろふこととなり、今後の新品種における栄養診断基準策定の際に参考となる。

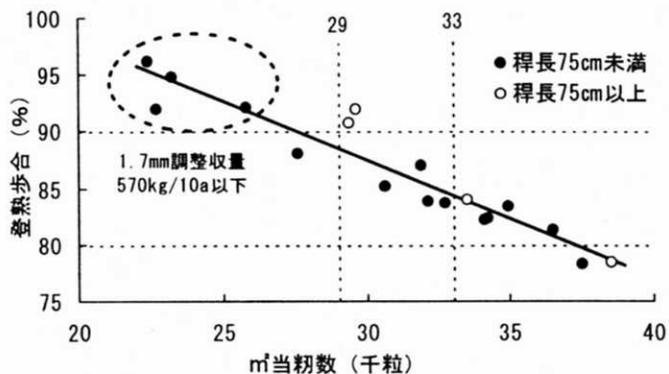


図1 m²当籾数と登熟歩合・稈長・精玄米収量との関係

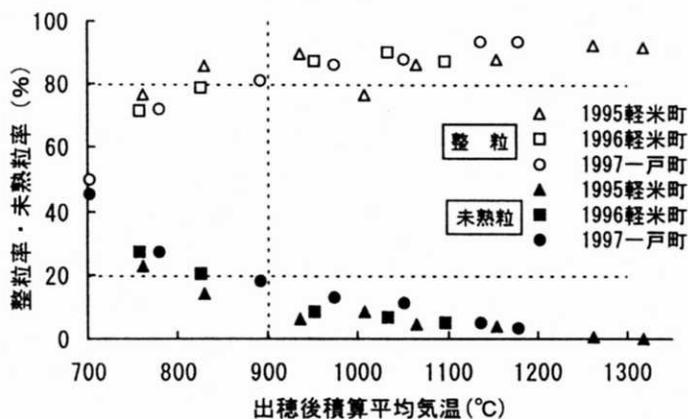


図2 出穂後積算平均気温と整粒及び未熟粒率

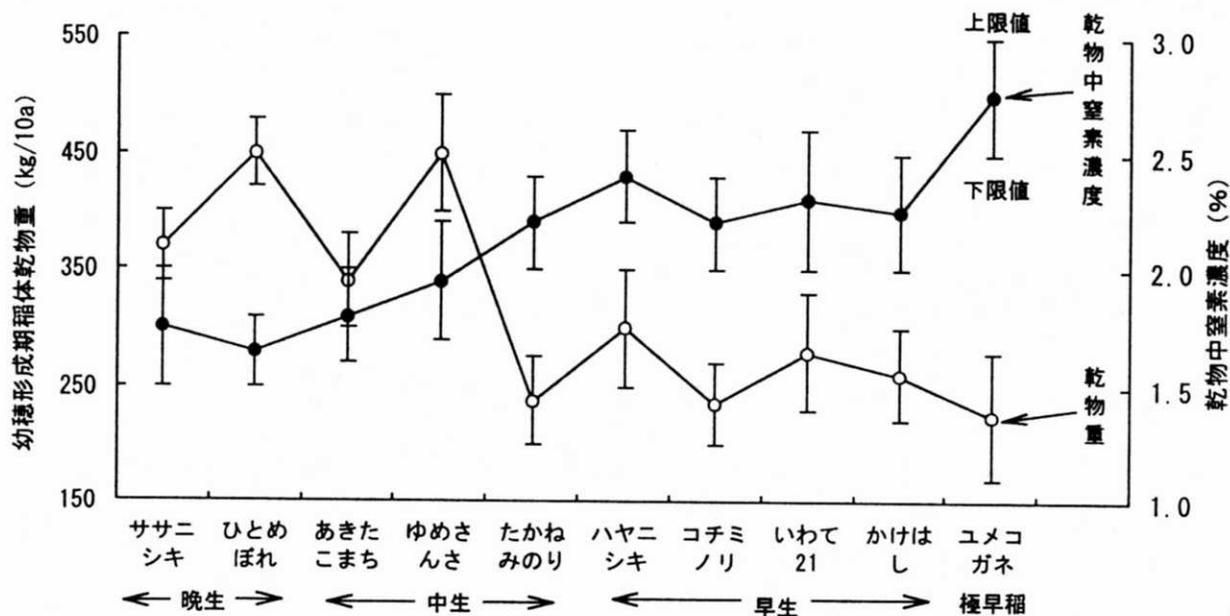


図3 水稻の早晩生と幼穂形成期の目標乾物重及び乾物中窒素濃度比較
注. 晩生品種の基準値は岩手県江刺市を中心に策定。同様に中生品種の基準値は江刺市、滝沢村、及び軽米町で、早生品種の基準値は主に軽米町で策定した。